

## 学校教育とインターネット

——「主体的な学び」を考える——

山口 拓 史

### はじめに

本稿は、2016年度に愛知学院大学（以下、本学という。）が実施した公開講座（運営：公開講座委員会）において筆者が担当した講演（6月16日および10月29日）の記録として、当日のスクリーン表示シートおよび配付資料を掲載したものである。

本学の2016年度公開講座は、「インターネット社会に生きる」を共通テーマに6名の講師（本学専任教員）が個別テーマを掲げ、春季が名城公園キャンパス、秋季が日進キャンパスを会場に原則として同一講演内容で実施された。春季講座は本学主催で名古屋市教育委員会共催となる名古屋市連携キャンパス講座でもあり、秋季講座は本学主催で愛知県・名古屋市・日進市・長久手市の各教育委員会が後援する講座となっている。

この公開講座で筆者が設定した個別テーマは「学校教育とインターネット—「主体的な学び」を考える」である。その設定の趣旨は次の通りである。

近年、ICT（情報通信技術）の世界においては、「日進月歩」では表現しきれないほどの進化がみられます。その結果、「ネット」と略称されるインターネットの普及は私たちの生活におけるさまざまな面できわめて大きな変化をもたらしており、私たちを取り巻く環境はSFの世界を超えるかのような状況にあります。

一方、学校教育の世界においても、21世紀型への教育ともいべき質的な変化が進んでいます。「主体的な学び」を意味するアクティブ・ラーニング（教員による一方向的な

講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称)はの一つです。それは、学校教育の最終段階である高等教育(=大学)の場ではもはや珍しいものではありません。そして、今後それは初等・中等教育(=小学校・中学校・高等学校)の場においても本格的に取り入れられるようになります。

この講義では、こうしたインターネットの普及と学校教育の質的な変化に目を向けながら、いわゆる「主体的な学び」について考えたいと思います。

(公開講座パンフレット12頁に掲載)

以下、本稿で掲載した資料は、【資料A】が講演会場でスクリーン投影したレジメを印刷・配付した資料であり、【資料B】が受講者の理解を助けるため講演会場で配付した内容補足資料である。なお、これらの掲載資料は秋季講座のものである。

また、講演内で再生した動画①～⑥(いずれも数分程度のショートムービー)については本稿で掲載はしていない。そのタイトル等については末尾の資料B8を参照されたい。

2016年度秋季公開講座10月29日【資料A】

2016年度 秋季公開講座 学校教育とインターネット

# 学校教育とインターネット

— 「主体的な学び」を考える —

山口 拓史（教養部准教授）

2016年度 秋季公開講座テーマ  
インターネット社会に生きる  
(第2回)



2016年度 秋季公開講座 学校教育とインターネット

1

## 本日の構成

1. はじめに……テーマ設定の趣旨
2. インターネット社会を中心に【A2～9】  
……「ネット社会」の様相  
— — — — — (休憩) — — — — —
3. 日本の学校教育を中心に【A11～17】  
……なぜ「主体的な学び」なのか
4. おわりに【A18】



2016年度秋季公開講座10月29日【資料A】

2016年度 秋季公開講座 学校教育とインターネット

2

## インターネットの思想

- ❖ “インターネットは軍事技術が民間に転用されたもの”との言説は誤解。
- ❖ インターネットは、“情報を蓄えたコンピュータの相互接続（ネットワーク）”という学術的関心が生み出したもの。
- ❖ 今日におけるインターネットは、“知的な人間活動全般にわたる大変重要な基盤施設（インフラ）”。



2016年度 秋季公開講座 学校教育とインターネット

3

## インターネットによる「地球社会」

- ❖ “人類が国境を越えて、あるいは国という概念とは全く独立に、自由にコミュニケーションできる新しい社会”の形成。
- ❖ 国際社会（国の集合体）ではない、“個人のレベルで地球全体に対する責任を考える「地球社会」”。
- ❖ “一人ひとりの活動がグローバルに展開される”「グローバル社会」。



## インターネット社会の様相

- ❖ “情報通信技術（ICT）の利用・活用の進展”、  
“ソーシャルメディアの普及”がもたらす変化。  
【B1,B2】
- ❖ “インターネットの適正利用”に向けた課題・  
取り組み。【B3,B4】



## 動画① インターネット依存

2014.10

- ❖ ネット依存：仕事・家事がおろそかになる。
- ❖ 2013年度調査で推計241万人（5年間で1.5倍）。
- ❖ 若者ほど依存度が高く、20代前半男性は19%。
- ❖ スマホやSNSの急速普及で一段と依存しやすい環境に。
- ❖ ネット利用しない時間を意識的に作るなどの  
予防策が必要。



2016年度秋季公開講座10月29日【資料A】

2016年度 秋季公開講座 学校教育とインターネット

6

## 動画② 小学生にスマホ リスク教育は？ 2016.4

- ❖ ケータイ・スマホの所持率は、高校生9割～、中学生5割～、小学生4割。
- ❖ 小学3年生に最初のピーク（約5割）があり、その保護者は「ケータイ・ネイティブ」世代。
- ❖ 小学生のスマホの所持率は16%で、使用率は41%。
- ❖ スマホの急激な普及によりトラブルが続発—小学6年生のLINEでの事例。



2016年度 秋季公開講座 学校教育とインターネット

7

## 「検索型の知識基盤社会」に生きる

- ❖ “インターネット社会に生きる”  
= ICTの利用・活用によってインターネットが普及した環境で、「知識を生み出し、加工し、使いこなし、人々に伝えて、みんなで共有することによって動いていく社会」に生きる。  
= 検索型の知識基盤社会に生きる。



## 21世紀型の教育へ

- ❖ 検索型の知識基盤社会への移行。



- ❖ ICTを利用・活用した教育【A9, A11～12】
- ❖ ネット社会に生きるための教育【A13～17】



## 動画③ ネットで遠隔授業

2016.3

- ❖ 過疎化が進む小規模校でのICT（情報通信技術）活用の取り組み（富山県南砺市の利賀小・井口小）。
- ❖ 小規模校の課題（①多様な意見・考え方に触れる機会がない、②大勢の中で自分の考えを発表する経験が積みにくい）への解決策。
- ❖ 「いろいろな考え方を子ども同士で学び合える環境」が必要。
- ❖ 新たな教育の可能性を期待される遠隔授業。



2016年度秋季公開講座10月29日【資料A】

2016年度 秋季公開講座 学校教育とインターネット

10

10分程度の休憩中です...



AICHI GAKUIN  
UNIVERSITY

2016年度 秋季公開講座 学校教育とインターネット

11

#### 動画④ 反転授業

2014.5

- ❖ 授業と自宅学習の役割を“反転”させて、学習効率の向上を図る。
- ❖ 教室で教えていた授業を事前にビデオ録画し、生徒は自宅でビデオを観て予習する。
- ❖ マイペースで繰り返し視聴できるため、しっかりと予習できるメリット。
- ❖ 予習しない生徒が落ちこぼれないよう、補習授業が必要。



AICHI GAKUIN  
UNIVERSITY

## 動画⑤ デジタル教科書

2016.3

- ❖ デジタル教科書：タブレット端末などを使って使用する、教科書と同様の教材。
- ❖ 2020年度をめぐりに全国の小中高校に導入、当面は紙媒体と併用、部分的にデジタルのみも可とする方針。
- ❖ 動画等を使うことで学習の幅が広がる、拡大表示機能により障害のある生徒などに細かな配慮ができる、などのメリット。



## 「アクティブラーニング」を考える

- ❖ 溝上慎一によるALの定義
- ❖ 一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。
- ❖ 能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。



2016年度秋季公開講座10月29日【資料A】

2016年度 秋季公開講座 学校教育とインターネット

14

## 動画⑥ 中教審 アクティブラーニング導入 2014.11

- ❖ 大学では一般的なALを小中高校にも今後取り入れる方針。
- ❖ 「知識はあるが、活用しない日本の生徒」への対応策。
- ❖ ①国が指導方法を決めるのか、②ALが適した分野とは、③教師は対応できるのか、などの未検討の課題が多い。
- ❖ 課題解決型学習のみがALではない。



AICHI GAKUIN UNIVERSITY

2016年度 秋季公開講座 学校教育とインターネット

15

## アクティブラーニング型授業の技法【B5】

アクティブラーニング型授業のさまざまな技法と戦略

| タイプ | 学習の形態 | 構図 A/B | 主導形態       | 伝統的講義に対するAL型授業としての戦略性 | 技法・戦略  |
|-----|-------|--------|------------|-----------------------|--|
| O   | 受動的学習 | —      | 教員主導型      | —                     | <ul style="list-style-type: none"> <li>●話し方(声の大きさやスピード)</li> <li>●板書のしかた</li> <li>●パワーポイントのスライドの見せ方</li> <li>●実物やモデルによる提示</li> <li>●コメントシート/ミニツツペーパー</li> <li>●小レポート/小テスト</li> <li>●宿題(予習/演習問題/e-Learning等)</li> <li>●クリッカー</li> <li>●授業通信</li> </ul>  |
| I   | 能動的学習 | 構図A    | 教員主導・講義中心型 | 低                     | <ul style="list-style-type: none"> <li>●ディスカッション</li> <li>●プレゼンテーション</li> <li>●体験学習</li> </ul>   |
| II  | 能動的学習 | 構図B    | 教員主導・講義中心型 | 中～高                   | <ul style="list-style-type: none"> <li>●協同・協調学習</li> </ul>   |
| III | 能動的学習 | 構図B    | 学生主導型      | 高                     | <ul style="list-style-type: none"> <li>●ディベート</li> <li>●LTD 話し合い学習法(Learning Through Discussion)</li> <li>●ピアインストラクション(Peer Instruction)</li> <li>●PBL(Problem-Based Learning)</li> <li>●チーム基盤学習(TBL: Team-Based Learning)</li> <li>●IBL(Inquiry-Based Learning)</li> <li>●ソクラテスマETHOD</li> <li>●ケースメソッド(Case-Based Teaching/Instruction)</li> <li>●発見学習(Discovery Learning)</li> <li>●ピアラーニング(Peer Learning)</li> <li>●FBL(Field-Based Learning)</li> <li>●加速学習(Accelerated Learning)</li> <li>●BLP(Business Learning Program)</li> </ul> |

(溝上慎一「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」71ページより一部加工)



AICHI GAKUIN UNIVERSITY

## 「主体的な学び」を考える

- ❖ 教育におけるパラダイム（=ある時代に支配的なものの見方や考え方）の転換。
- ❖ 「教授」パラダイムから、「学習」パラダイムへ。  
【B7】



## 「主体的な学び」と「アクティブラーニング」

- ❖ 両者の関係は？
  - ❖ 「主体的な学びはアクティブラーニング以上のものであるので、アクティブラーニングは主体的な学びの下次元に位置する。」
- 素晴らしい“聴講”は、アクティブラーニングとはいえないが、主体的な学びであるとはいえる。



2016年度秋季公開講座10月29日【資料A】

2016年度 秋季公開講座 学校教育とインターネット

18

## おわりに...

- ❖ “ゆとり世代”は21世紀型教育の第一世代？！
- ❖ “方法知”を習得し、〈情報→知識→知恵〉の流れを生み出す。
- ❖ 学校教育におけるALが一つの契機となって、人々が主体的に学び、主体的に生きる社会を実現することが重要である。



2016年度 秋季公開講座 学校教育とインターネット

19

## ご清聴ありがとうございました

### 学校教育とインターネット

—「主体的な学び」を考える—

山口 拓史（教養部准教授）

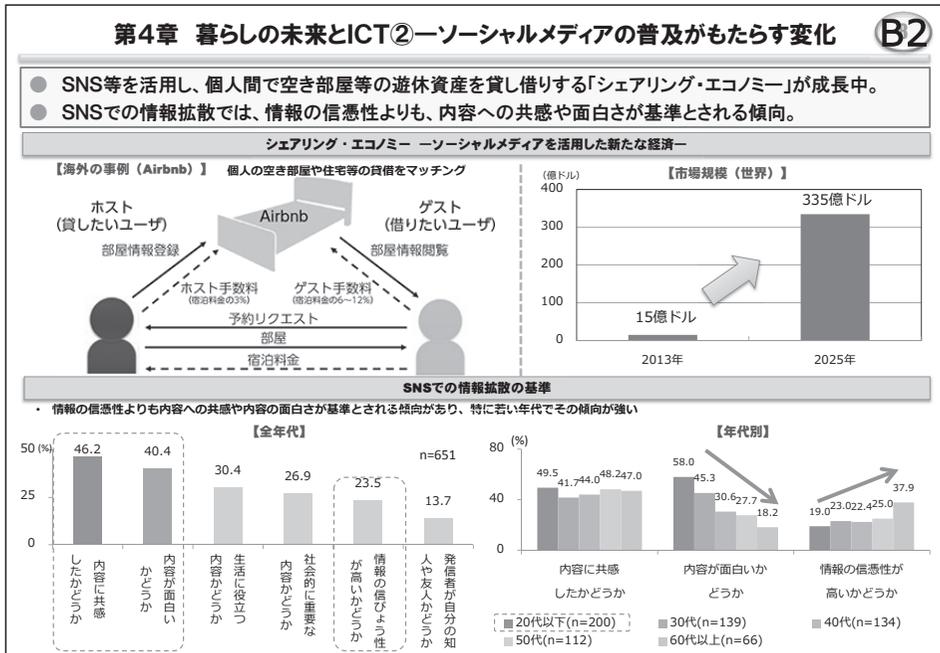
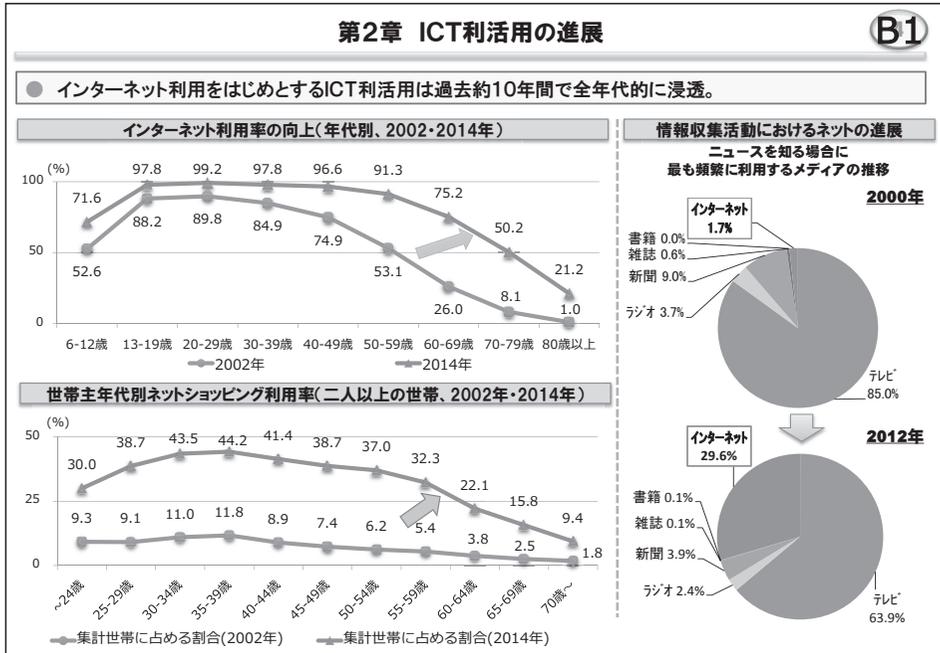
2016年度 秋季公開講座テーマ

インターネット社会に生きる

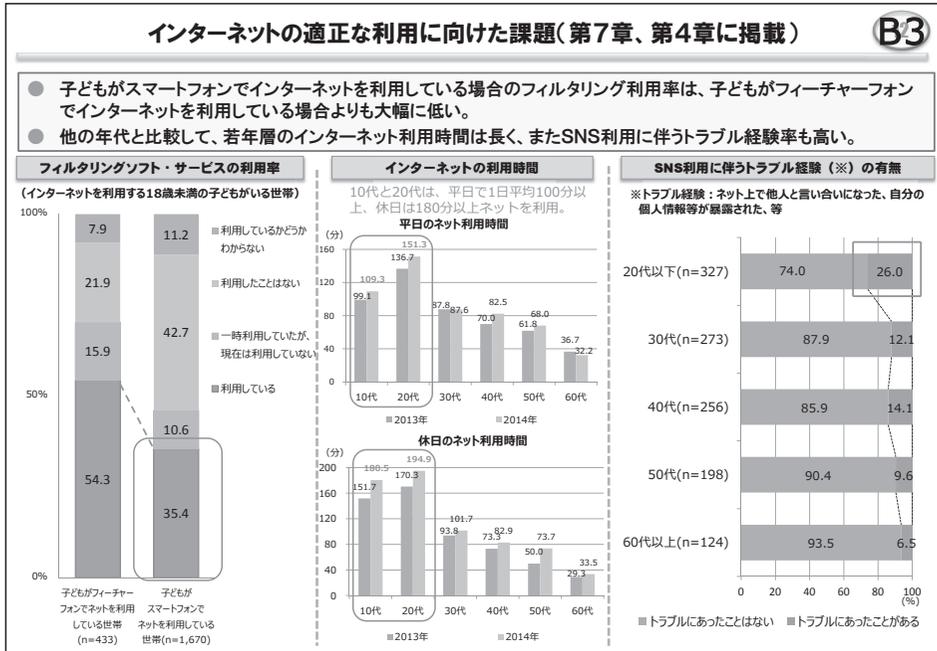
（第2回）



2016年度秋季公開講座10月29日【資料B】



2016年度秋季公開講座10月29日【資料B】



### インターネットの適正な利用に向けた取組(第8章に掲載) B4

- 総務省では、フィルタリングの利用促進や、家庭でのインターネット利用ルールづくり支援、青少年のICTリテラシー向上等のための啓発活動等を実施。

#### 青少年によるスマートフォンの安心利用等に向けた啓発活動

- 総務省総合通信局等が中心となり、各地域で活動する関係者（自治体、警察、PTA、学校関係者、携帯電話事業者、携帯電話代理店、SNS事業者、消費者団体、NPO等）が幅広く連携し、フィルタリング、スマートフォンの特性やサービス構造、プライバシーに関する情報、セキュリティ対策等の情報を盛り込んだ周知啓発資料等を作成。
- 資料等を活用し、青少年及び保護者・教員等に対して、ICTリテラシー向上のための総合的な周知啓発活動を展開。

マツダスタジアムでの周知活動

入学説明会における啓発活動

#### 青少年のICTリテラシー向上に向けた取組

- 総務省は、文部科学省及び通信関係団体等と連携し、子どもたちのインターネットの安心・安全な利用に向けて、保護者、教職員及び児童生徒を対象とした講座を全国規模で行う「e-ネットキャラバン」を実施。
- 2014年度は全国2,789箇所（小学校、中学校、高校等）で開催。児童生徒、保護者、教職員など約51万人が受講。

キャラバンの模様

キャラバン講師の講演会

- ICTリテラシーを総合的に育成するプログラムとして、「伸ばそう！ICTメディアリテラシー〜つながる！わかる！伝える！これがネットだ〜」を推進。学校用・家庭用の教材を開発している。

学校用のテキスト教材  
ティーチーズガイド  
(指導者用)

学習テキスト  
(児童用)

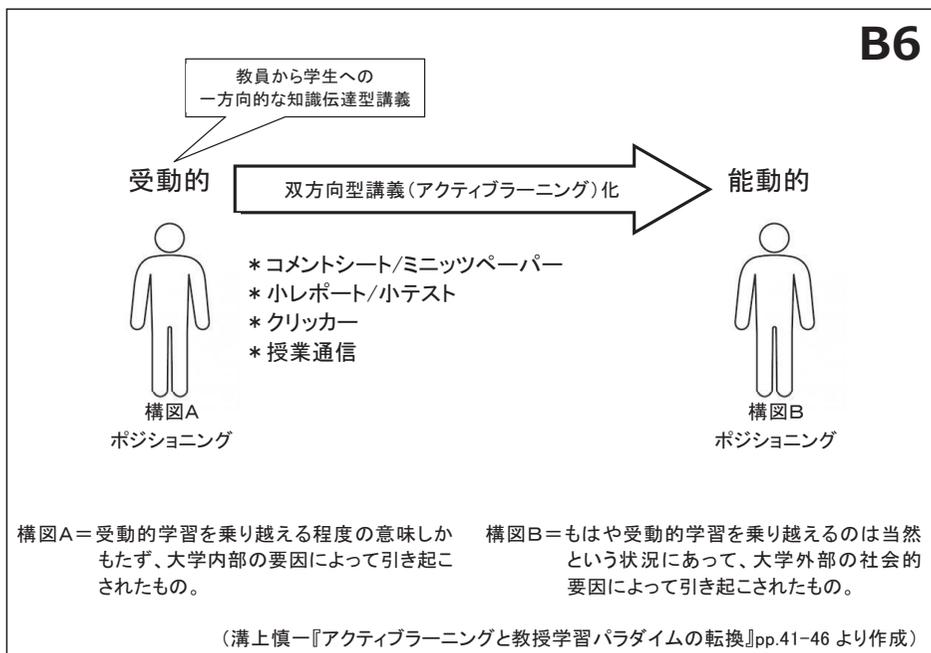
家庭学習用ガイドブック  
(保護者用)

学習ワークブック  
(児童用)

2016年度秋季公開講座10月29日【資料B】

| アクティブラーニング型授業のさまざまな技法と戦略 |       |        |            |                       | B5   |
|--------------------------|-------|--------|------------|-----------------------|--|
| タイプ                      | 学習の形態 | 構図 A/B | 主導形態       | 伝統的講義に対するAL型授業としての戦略性 |  |
| O                        | 受動的学習 | —      | 教員主導型      | —                     | <ul style="list-style-type: none"> <li>●話し方(声の大きさやスピード)</li> <li>●板書のしかた</li> <li>●パワーポイントのスライドの見せ方</li> <li>●実物やモデルによる提示</li> </ul>   |
| I                        | 能動的学習 | 構図A    | 教員主導・講義中心型 | 低                     | <ul style="list-style-type: none"> <li>●コメントシート/ミニッツペーパー</li> <li>●小レポート/小テスト</li> <li>●宿題(予習/演習問題/e-Learning等)</li> <li>●クリックカー</li> <li>●授業通信</li> </ul>   |
| II                       | 能動的学習 | 構図B    | 教員主導・講義中心型 | 中～高                   | <ul style="list-style-type: none"> <li>●ディスカッション</li> <li>●プレゼンテーション</li> <li>●体験学習</li> </ul>   |
| III                      | 能動的学習 | 構図B    | 学生主導型      | 高                     | <ul style="list-style-type: none"> <li>●協同・協調学習</li> <li>●ディベート</li> <li>●LTD 話し合い学習法(Learning Through Discussion)</li> <li>●ピアインストラクション(Peer Instruction)</li> <li>●PBL(Problem-Based Learning)</li> <li>●チーム基盤学習(TBL: Team-Based Learning)</li> <li>●IBL(Inquiry-Based Learning)</li> <li>●ソクラテスマETHOD</li> <li>●ケースメソッド(Case-Based Teaching/Instruction)</li> <li>●発見学習(Discovery Learning)</li> <li>●ピアラーニング(Peer Learning)</li> <li>●FBL(Field-Based Learning)</li> <li>●加速学習(Accelerated Learning)</li> <li>●BLP(Business Learning Program)</li> </ul> |

(溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』71ページより一部加工)



2016年度秋季公開講座10月29日【資料B】

**B7**

**教育パラダイムと学習パラダイムの比較一覧**

|            | 教育パラダイム   | 学習パラダイム   |
|------------|---|---|
| 使命と目的      | <ul style="list-style-type: none"> <li>* 教育を提供／伝授する</li> <li>* 知識を教員から学生に移譲する</li> <li>* コースやプログラムを提供する</li> <li>* 教育の質を改善する</li> <li>* 多様な学生のアクセスを可能にする</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>* 学習を生み出す</li> <li>* 学生から知識の発見や考えを誘い出す</li> <li>* 強力な学習環境を創出する</li> <li>* 学習の質を改善する</li> <li>* 多様な学生の成功(成果)を可能にする</li> </ul>   |
| 成果の基準      | <ul style="list-style-type: none"> <li>* インプット、資源</li> <li>* 入学する学生の質</li> <li>* カリキュラム開発と拡大</li> <li>* 資源の量と質</li> <li>* 在籍登録者数と収入の増加</li> <li>* 教員と教育の質</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>* 学習と学生の成果の結果</li> <li>* 卒業する学生の質</li> <li>* 学習技術の開発と拡大</li> <li>* 成果の量と質</li> <li>* 集学的学習の伸びと能率</li> <li>* 学生の学習の質</li> </ul>   |
| 教育／学習の機構   | <ul style="list-style-type: none"> <li>* 原子論的～全体よりも部分重視</li> <li>* 時間は一定に保ち、学習は変動する</li> <li>* 50分講義、3単位コース</li> <li>* クラスは一斉に開始／終了する</li> <li>* 1クラスに教員が1人</li> <li>* 独立した学問分野、学部</li> <li>* 教材をカバーする</li> <li>* コース終了時の採点試験</li> <li>* クラス内で担当教員による成績評価</li> <li>* プライベートな評価</li> <li>* 学位は単位時間数の累積に相当する</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>* 全体論的～部分よりも全体重視</li> <li>* 学習を一定に保ち、時間は変動する</li> <li>* 学習環境</li> <li>* 学生の準備ができたとき環境の準備ができる</li> <li>* 学習体験がうまくいくなら、なんでも可能</li> <li>* 学習分野や学部を超えた協同</li> <li>* 規定した学習成果をあげる</li> <li>* 開始前／中間／終了時の評価</li> <li>* 外部による学習の評価</li> <li>* 公的な評価</li> <li>* 学位は証明された知識及び技能である</li> </ul> |
| 学習理論       | <ul style="list-style-type: none"> <li>* 知識は“外に”ある</li> <li>* 知識は指導者が伝授する“塊”や“断片”で現れる</li> <li>* 学習は累積で直線的である</li> <li>* 知識の倉庫という喩えに合致する</li> <li>* 学習は教師中心に管理される</li> <li>* “活気ある教師”、“活気ある学生”が求められる</li> <li>* クラスルームと学習は競争的で個人主義的である</li> <li>* 才能や能力はわずかである</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>* 知識は一人ひとりの心の中にあり、個人の経験によって形成される</li> <li>* 知識は構築され、創造され、“取得される”</li> <li>* 学習は枠組みの重なりで相互作用である</li> <li>* 自転車の乗り方を学ぶ喩えに合致する</li> <li>* 学習は学生中心に管理される</li> <li>* “積極的な”学習者が求められるが、“活気ある”教師は不要</li> <li>* 学習環境と学習は協力的、協同的、助け合いである</li> <li>* 才能や能力があふれている</li> </ul>                   |
| スタッフの役割の性質 | <ul style="list-style-type: none"> <li>* 教員は主として講義者である</li> <li>* 教員と学生は独立して別々に行動する</li> <li>* 教師が学生を分類し選別する</li> <li>* スタッフは教職員と指導過程を援助／支援する</li> <li>* 専門家は誰でも教えることができる</li> <li>* 直線的管理～独立した役者たち</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>* 教員は主として学習方法や環境の設計者である</li> <li>* 教員と学生は一緒に、あるいは他のスタッフも加えてチームで活動</li> <li>* 教師は学生それぞれの能力や才能を引き伸ばす</li> <li>* スタッフ全員が、学生の学習と成果を作り上げる教育者である</li> <li>* 学習力を高めることは骨が折れる、複雑なことである</li> <li>* 共同管理～チームワーク</li> </ul>   |

(主體的学び研究所『主體的学び』創刊号、p.7より一部改変)

# B8

## 引用・参考文献等

1. 村井 純『インターネット』岩波新書、1995年
2. 村井 純『インターネットⅡ』岩波新書、1998年
3. 村井 純『インターネット新世代』岩波新書、2010年
4. 古瀬幸宏・廣瀬克哉『インターネットが変える世界』岩波新書、1996年
5. 安田幸弘『市民インターネット入門』岩波ブックレット、1997年
6. 新井紀子『ネット上に学びの場を創る』岩波ブックレット、2003年
7. 総務省『平成 27 年版 情報通信白書』PDF 版、総務省ホームページより
8. 「知識基盤社会って何？」日本 PBL 研究所（NPO 法人）准公式ブログ「PBL で次世代は育つ」（<http://blogs.yahoo.co.jp/pblminnesota/47543372.html>）
9. 溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂、2014年
10. 主体的学び研究所『主体的学び』創刊号～3号、東信堂、2014～2105年

動画①「ネット依存 5年間で1.5倍に増加」NHKニュース（2014年10月15日）

動画②「小学生にスマホ リスク教育は？」NHK「視点・論点」（2015年11月6日）

動画③「ネットで遠隔授業」NHKニュース（2016年3月3日）

動画④「反転授業」NHKニュース（2014年5月23日）

動画⑤「デジタル教科書」NHKニュース（2016年3月4日）

動画⑥「課題解決型の授業へ 議論始まる」NHKニュース「ここに注目」（2014年11月26日）